

Differences in magnetic resonance findings between symptomatic and asymptomatic pre- collapse osteonecrosis of the femoral head

畑中，敬之

<https://doi.org/10.15017/2348701>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :



(別紙様式2)

氏 名	畑中 敬之			
論 文 名	Differences in magnetic resonance findings between symptomatic and asymptomatic pre-collapse osteonecrosis of the femoral head			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	岡田 誠司
	副 査	九州大学	教授	小田 義直
	副 査	九州大学	教授	二宮 利治

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

特発性大腿骨頭壊死症（ONFH）に於いては単純X線所見に基づいた大腿骨頭圧潰の有無で病期分類がなされ、治療法の決定や治療成績の検討が行われるが、単純X線所見での病期判定は困難なケースも多く、また症状との関連も不明である。そのため、申請者らは圧潰前のONFHと診断された91患者123症例における無症候性ONFHと症候性ONFH患者のMRI所見の違いを検討し、病態との関連を検討した。その結果、骨髄浮腫、関節液貯留、軟骨下骨折のMRI所見を認めた割合は、それぞれ症候群46股のうち87.0%、80.4%、34.8%であったのに対し、無症候群77股に於いてはそれぞれ0%、28.6%、0%であり、2群間で有意な差を認めた。骨髄浮腫所見を認めた症候群では85.7%(30/35股)が持続性の疼痛および骨頭圧潰のためにMRI検査後平均3.47ヶ月で手術を施行されていたが、一方で骨髄浮腫所見無しの無症候群では37.9%(25/66股)が平均20.7ヶ月で手術を施行されていた。これらの結果は骨髄浮腫所見と不顕性骨折の関連を示唆しており、単純X線所見では区別できない骨頭圧潰前のONFHは、骨髄浮腫の有無により異なる病期に区別できるものと考えられた。

以上の成績はこの方面の研究に新たな知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、概ね適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。